

漢法苞徳塾資料	No. 051
区分	92 年夏期合宿塾長講話
タイトル	気の概念の問題をめぐって
著者	八木素萌
作成日	

◎この主題を選んだ理由について……直接の契機二つ

6月の入門講座の帰りに嵯峨君から1枚のコピーをもらった。それが『人間科学会－掲載記事録 No.2－1992年6月号』である。そこには人間科学会・副会長・湯浅泰雄の署名入りの「気」と人間観」という文章がある。彼はこの中で東洋医学について重要なことを述べている。

7月に入って間もない頃だったと思うが、NHK－TVが東洋医学を紹介する放送をした中で、湯浅氏の論と同じような事を言っていた。こういう認識が一般化するのは困った問題であると、私にはかなり強く感じられたのである。

この二つが、「気が判かる」とか「気を動かす治療」とか言われる問題について、どうしても発言して置くべきであると思わせた直接的な契機となったものである。勿論これのみが契機ではないのである。

今日の日本の鍼灸界にも、ある種の流行のように「気」が語られる傾向が見られる、その一部には、鍼灸治療を腐敗させる危険性を孕んだタイプのものを見受けられるので、こういう傾向をイデオロギー的に助長することにならないように、「気の語彙」概念について考察して置くべきであろうと思ったのである。

◎気の語彙概念をめぐって

1. 人の認識の伸展と、それに伴う語彙概念の変化には、法則的なものが見られる。認識は、大ざっぱなものから次第に精密なものになって行き、即物的のものから次第に一般化されたものへ、具体的な観念から次第に一般化されたものへ、さらに抽象化されたものに進んで行く。言葉は、当然のことながら、認識のこのような発展・深化・精密化を反映する。これは表現にも変化をもたらし、「語」を分化させる面も起こさせるようになる。「気」の概念も同様である。
2. 既に『黄帝内経』に記述されている「気」は、膨大な情報を内包したものであって、語彙概念の歴史的変化の一般的な傾向を考慮すれば、その多彩な語彙の故に、それが分化して行く状況に対応して、語そのものが分化しても不思議ではないのである。語が多く新しい語に分化する直前の状況にあると、言うことができるだろう。
3. 事実、「春気」を平易に然し正確に翻訳しようとする時、或は「気海～臆中」と言う語を具体的な臨床問題・臨床的な意味で穴性や治効を示唆するものと見なして解釈し翻訳しようとする時、

或はまた、「……邪客于手陽明之絡・令人氣滿胸中・喘息而支肘・胸中熱……」の場合の「氣」について平明に説明しようとする時、その他、多くの篇に記述されている「氣」と言う語を、文字が同じだから語彙概念として同じものであると思って把握できるものでは、断じて無いものである。

4. むしろ、ほとんどの場合は、用いている意味内容が異なったものである。或は、「働き」或は「呼吸」或は「ガス」或は「影響」或は「集合」或は「アルゴリズム」或は「雰囲気」或は「ある要素」或は「力」その他等々のように極めて多様な意味を帯びている。
5. 従って「氣」なる語が用いられている文の論点やテーマに応じて、具体的に今日用語に置き換えるようにして読み取って行くことが重要である。もしこのように読まないとしたら、結局のところ理解しないまゝであるに過ぎない。悪くすれば、「氣」を一色に＝従ってこの場合には曖昧な状態のまゝ＝把握して、『内経』はじめとする医学的な古典に用いている意味内容を、途方もなく「薄めてしまう」「ボヤケさせてしまう」ことになりかねないのである。そのような読み方は古人に対する冒瀆にもなりかねない。

◎「ホリスティック」で「サイコスوماتィック」なものと東洋的な生命観と

1. 湯浅の東洋医学の紹介の内容
2. 宇宙との合一と生命
3. 「流れる」とは「液体の存在」様式か？それとも、不断の運動と変化の状態を例えた表現か？
4. 絶えず全体との関連と事物の全一性の構図～マクロの中のミクロとミクロの中のマクロ～横断する独特の論理～体節・皮膚節・筋節そして卵割から組織性・構築構造性が生じると言う連続の不連続～バイブレーションと位相～相対しているから共鳴できる～
5. 三才の中の存在～炎のように
6. イレコ構造に存在していた横断性・共時性
7. 『史記』の「扁鵲倉公列伝」の中の「六不治論」に、「…信巫不信医六不治也…」とあるように、漢法医学は確立された初期の頃より神秘主義を排除して来た歴史を持っている。
「目に見えないもの」を現象論的に捉えようとしただけでは無く、もっと深く認識しようとしていたことは、丁寧に『内経』『難経』『傷寒論』などを研究すれば判かることである。
少なくとも、我々は「神秘主義」に傾斜する危険とはタモトを分かすべきである。